

『愛媛新聞』2022年1月19日文化欄「詩手帳から」

【書評】澤 正宏著『核災10年、福島からの声—原発・裁判・文学の記録』

●好評発売中です!!

離れ小島

詩手帳から

昨年11月に刊行された『核災10年、福島からの声』（クロスカルチャー出版）

の著者澤正宏は、西脇順三郎の研究者としてなじみ深い。筆者は学生の頃、澤の著作などで詩史の基礎を学んだ。

一方で澤は東日本大震災以降、

福島や伊方原発の設置反対運動に関わる膨大な『裁判資料』の整理に努めてきた。『核災10年』は、事故後の福島に関するエッセーのほか、資料の解題などを収める。

本をめぐりつつ、事故を巡る国や電力会社の無責任ぶりを思い出した。原子炉建屋の水素爆発による放射性物質の「直接の被曝者である者は、こつしたあからさまな隠蔽によって命を削られるわけだ

から、国家を敵視する眼を持つ多くの県民がいても当然のこと」などの指摘に触れては、誰しもつなずくほかないのではないか。

何より原発事故は、他者や地域の尊厳を蹂躪してあからさまに凶太い人たちの光景であったと個人的には思う。かつてある国会議員は、四国は「離れ小島」だと指摘した。今後の四国の処遇を考えたとき、胸に刻むべき言葉である。